

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K02411

研究課題名（和文）明治期の地域社会における公教育制度の展開と天皇権威の受容に関する実証的研究

研究課題名（英文）The Empirical Study on the Development of the Public Education System and the Acceptance of the Emperor's Authority in Local Communities during the Meiji era

研究代表者

鈴木 敦史（SUZUKI, ATSUSHI）

東海大学・海洋学部・准教授

研究者番号：40645305

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、明治期の地域社会において天皇の権威が受容されていく過程を、公教育制度の展開に留意して検討した。その結果、山形県東置賜郡で、県令三島通庸と同郷の郡長柴山景綱が近代学校の設立と地域社会の近代化を進めた過程と、南置賜郡とは対照的に県令三島との政治的距離を接近させた東置賜郡の近代化は進み、三島自身も、その実現に期待を寄せた事実、さらには、東置賜郡の川樋学校、屋代学校は、天皇の訪問に際しては、立礼の実践などを通じて人々が天皇の権威を受容する素地を形成し、さらに天皇の訪問を「名誉」「誇り」と受け止め、地域社会に近代的な天皇像を醸成させる役割を担った、という3点が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、明治期の山形県において、学校教育が整備され、そしてその学校を通じて近代的な天皇像が形成される過程を、強権的な手法で急速な近代化を図った県令三島通庸と地域社会との政治的距離感に留意して明らかにした点にある。さらにその過程を明治前期に行われた天皇巡幸に着目して検討することで、地域社会に創設された学校を通じて人々に近代的な天皇像が形成されていくプロセスの一端を示した。これらの検討は、教育史研究における近代天皇制の検討にも新たな手法を提示した点で、有意義なものと考えている。

研究成果の概要（英文）：This study examined historically the process of acceptance of the Emperor's authority in local communities during the Meiji period, focusing on the development of the public education system. As a result, the following three points became clear.

In Higashiokitama-gun, Yamagata Prefecture, Mishima, the governor of the prefecture, had Shibayama, the county mayor, establish modern schools and modernize the local community. The modernization of Higashiokitama-gun was promoted by people who had political sympathy for Mishima's management, in contrast to Minami-Oshi-gun, which was opposed to Mishima. Mishima then expected that Higashiokitama-gun, which sympathized with him, would complete his project (modernization of the local community). The schools in Higashiokitama-gun accepted the Emperor's visit as an "honor" and "pride" and encouraged the people to accept his authority.

研究分野：日本教育史

キーワード：近代学校 置賜地方 東置賜郡 三島通庸 柴山景綱 地方巡幸 明治天皇

## 1. 研究開始当初の背景

日本教育史研究において、近代天皇制の問題はこれまでも検討の対象とされ、教育勅語や御真影、またはそれらに関わる学校行事や慣行についての詳細な検討は積み重ねられている。こうしたなかで、代表者は、従来教育史研究において十分に対象とされてこなかった明治前期の天皇巡幸、とりわけそこでの天皇の学校訪問に着目してきた。

一方で、代表者はこれまで、明治前期の地域社会における公教育制度の展開について、地域社会で教育の近代化の象徴として設立・運営されてきた公立学校に着目し、山形県庄内地方を事例として検討してきた。ここでは、明治5年の学制頒布以降、地域社会において近代学校が創設されていく際の地域的支持基盤の形成過程を、地域社会において、政府の示す公教育政策を模範的に体現していった、「公立「先進校」」の存在に着目して検討を行った。(科学研究費助成事業若手研究B「明治前期における公立「先進校」の設立と地域的支持基盤の形成に関する実証的研究」課題番号26780461、平成26年～平成29年度)。この研究により、近代学校の存在意義が未だ十分に認知されていなかった明治前期の地域社会において、公教育制度が展開していく上で、「公立「先進校」」が、設備面や教育の内容面に関して主導的な役割を果たしたことが明らかになった。

本研究では、このようなこれまでの研究の進捗を踏まえ、そうした近代化の象徴となった学校を通じて、当地の子どもたちや地域社会の人々がいかに天皇の権威を受容していったのかを、地方巡幸における明治天皇の訪問校に焦点をあて、さらに山形県の置賜地方を対象地域として明らかにしようと考えた。

なお研究開始当初は、そうした学校の天皇巡幸後の学校運営の特徴にも着目する予定であったが、後述する検討対象地域の拡大にとともに、本研究では、明治天皇の学校訪問に至るまでの過程と、天皇訪問時の学校や地域社会の様相の検討に注力することにした。その上で、巡幸後の天皇像の諸相については、現段階で把握している資料から読み取れる点を示唆するに留めた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、明治期の地域社会において天皇権威の受容されていく過程を、公教育制度の展開との関係性に着目して歴史的に検討することである。その際本研究では、天皇巡幸における天皇の学校訪問に焦点をあて、巡幸での訪問をきっかけに生じた天皇との接点が、学校に通う生徒や学校を支持する人々のなかに新たな天皇像を創出していく過程を検討する。

明治前期の地方巡幸では、明治天皇は主に各府県の師範学校などを訪問し、地域の学校教育の状況を見分けてまわったが、数こそ少ないものの公立学校のなかでもその対象となったものがある。本研究では、こうした学校への明治天皇の訪問に着目し、そこで学校に通う生徒や、学校を支える地域社会の人々のなかで天皇の権威が受容されてゆく過程を検討した。

## 3. 研究の方法

上記の目的を達成するために本研究は、以下の2点の方法を採った。

### (1) 地方巡幸における天皇の学校訪問への着目

本研究では、上記の課題を検討するにあたり、明治14年に実施された東北・北海道への巡幸における明治天皇の学校訪問に焦点をあて、さらに山形県の置賜地方を主要検討対象とした。そして、地域社会において天皇の権威が受容される過程を、近代公教育制度の展開との相関に着目しながら検討した。地方巡幸における明治天皇の学校訪問に関する検討自体は、これまでも代表者が継続的に取り組んできたものではあるが、本研究では、そこで新たな天皇像が形成される過程を検討の中心課題とした。

地域社会の教育を主導した公立学校に天皇が訪問することで、その学校は皇室との接点を有した。その学校の創設に関与した地域の人々やそこに通う子どもたちは、そうした学校に通い、関わることへの「誇り」を感じ、やがて地域社会においては新たな天皇像が形成されていくことになる。天皇の訪問を通じて、そこ通った生徒たちはもとより、地域社会において近代学校の創設に関与し地域教育を下支えした人々が、その学校にどのような期待感を抱き、その後彼らの中にどのような天皇像が形成されていったのかを明らかにしようとしたのが本研究の方法的特徴である。

### (2) 検討対象としての山形県置賜地方

本研究では、具体的な研究対象として明治前期の山形県置賜地方を設定した。新制山形県は、1876(明治9)年8月に、鶴岡県、山形県、置賜県が統一され、創設されたが、そこでは初代県令に三島通庸が就任し、強い政治的リーダーシップのもと、抵抗運動への強硬な弾圧と、学校や道路等のインフラ整備を進めた。三島が福島県令に就き、山形県を転出するのは、1882(明治15)年であるが、その間に実施された明治14年の巡幸は、三島にとって、自らのリーダーシップにより、近代化された地域社会をアピールする絶好の機会ともなった。さらにこの過程では、三島と同郷の柴山景綱が東置賜郡長に就き、三島の構想する教育の急速な近代化を押し進めた。本研

究では、こうした過程を、置賜地方の中心都市であった南置賜郡の場合と対比させながら検討した。加えて斯様の検討に際しては、三島の主導する県政運営との政治的距離感に留意しながら、そこで進められた学校教育制度の展開と、天皇の訪問をきっかけとして形成される近代天皇像のありようについて明らかにした。

なお、対象地域に関しては、当初は米沢を中心とする南置賜郡を設定する予定であった。しかし研究の進捗に伴い、前述の柴山景綱が郡長に就いた東置賜郡に設立された高畠小学校の事例を中心に検討することで、明治前期の地域社会における、学校設立と天皇訪問に向けた人々の機運のありようをより鮮明化することが有意義であると考えた。したがって、検討地域の設定は、当初の南置賜郡から、東置賜郡を含んだ“置賜地方”と改めて、範囲の拡大を行った。

#### 4. 研究成果

本研究では、上記のような目的と方法を通じて以下の3点を成果として得た。

##### (1) 東置賜郡の教育政策と高畠小学校の創設について

本研究では、明治前期の山形県における公教育制度の展開を、置賜地方を対象に整理し、さらにその動向を、東置賜郡を中心に検討した。その際に主な検討の対象となったのが高畠小学校とその創設に至る過程での郡長柴山景綱の関与である。

県令三島通庸は、新制山形県の成立(1876年(明治9年)8月)に伴い県令に就くと、一郡一中学校政策を推し進めたが、そうした地域教育の急速な近代化は置賜地方でも図られた。米沢藩の旧習が残る南置賜郡の米沢に対し、明治以前より米沢藩の圧政に苦しみ天領も多く抱えた東置賜郡の高畠村では、地域の豪商らが三島県政との政治的距離を縮め、郡内の近代化を積極的に進めた。その際郡長として中心的な役割を果たしたのが、柴山景綱だった。

三島と同郷の柴山は、県令に着任した三島の招きにより山形県八等出仕となり、その後師範学校建築掛として師範学校の新築工事にあたった。そしてその後、明治11年に東置賜郡が成立すると初代郡長に就き、東置賜郡庁舎の新築や学校の新設に取り掛かる。そして高畠村では、高畠以外の村からの反対意見が出されるなか、4つの村と共同で高畠小学校を新築する決定が柴山によって下された。県令三島はかねてより、「模範」となる「盛大ナル一学校」の創設による地域教育の近代化を図っており、それは庄内地方で進められた。高畠小学校の創設は、そうした三島の近代化策を東置賜郡において体現したものであり、本研究ではその過程が明らかになった。

##### (2) 東置賜郡の三島県政との政治的親和性について

明治前期の山形県においては、地域行政のありようを検討する際に、三島県政との政治的親和性を考慮する必要がある。本研究では、そうした両者の関係性を置賜地方における高畠(東置賜郡)と米沢(南置賜郡)を比較しながら検討した。

「土木県令」として知られた三島は、地域社会の急激な近代化を図ったが、そのために地域に課した負担も大きかった。とりわけ1876(明治9)年に起工された栗子隧道開鑿は、三島にとって山形県の近代化を象徴するものであり、彼が県令として最も重視した大事業だった。だが、その事業に対して県から各地域に求められた献夫や献金といった経済的、人的な貢献は、地方行政や地域住民の生活を圧迫した。こうしたなか、栗子隧道の始点である米沢の人々の反応が県に対して厳しいものであった一方で、屋代郷(高畠)の人々の反応は好意的なものだった。さらに、そうした態度を受けて三島が、米沢には国道を通さず屋代郷(高畠)から直接に栗子へと隧道を通すとしたところ、米沢士族たちが慌てて翻意したともいわれ、置賜地方においては、米沢に比して「屋代郷に期待した三島県令」(『高畠町史』)というように、県政に対するスタンスが異なる両者が併存していた。

同郷の柴山を東京から呼び寄せ、東置賜郡政に当たらせた三島だったが、そこには、旧藩勢力が残存し県政に対する反発が強い米沢に対し、東置賜郡の高畠で自らの描く地域社会の近代化を実現しようとする思いがあり、高畠小学校の創設も、そうした三島県政との近い政治的距離感のなかで進められていったことが明らかになった。

##### (3) 明治14年巡幸における天皇の東置賜郡訪問と学校教育を通じた天皇権威の受容について

本研究では、明治14年巡幸で地域社会において天皇の権威が受容される過程を、主に明治天皇の学校訪問に着目しながら明らかにした。

明治14年6月11日に布告された巡幸で、9月22日に山形県に入った天皇の行列は、10月1日には山形市内から東置賜郡に至る。その後天皇は、郡内の川樋小学校で小休をとり、その後赤湯を経て高畠に到着する。そして翌2日に屋代学校(高畠小学校)で校内での検分をした後米沢に向かい、3日に興譲小学校への訪問をし、栗子隧道の開通式を終え、福島に出た。

こうした天皇の訪問に先立って、県内でも受け入れに向けた準備が進められたが、その中心となったのが各郡の郡長たちだった。東置賜郡では、柴山景綱がその任にあたったが、当時の『山形新聞』には、天皇を迎える行在所(郡役所)の新築や郡内の道路整備に要する献納金や服役の協力を地域の人々から取り付けた彼の人望を称賛する記事が掲載された。また、同紙の検討からは、当初より人々から不信感を抱かれていた地域の豪商たちが天皇の受け入れに向けた準備に積極的に関与し、またそこで人々も「不都合なき」受け入れを実現すべく協働する過程を通じて、地域社会を構成する一因としての自覚を強めていったことも明らかになった。

さらに、学校での奉迎は、沿道での一般の人々のそれとは対照的に組織化され、生徒や教員たちは新たに定められた立礼で整然と天皇を迎えた。また、郡役所周辺の中心地では、軒先に日の丸や提灯が飾られ夜は花火が打ち上げられるなどの賑やかな歓迎がなされた。地域の学校は、天皇の訪問を受け入れる中心的な場として機能し、また天皇への立礼の実践などを通じて、人々が天皇の権威を受容していく素地を形成していったといえる。

置賜地方としてみた際に、天皇の学校訪問において授業の天覧や生徒への褒賞など、教育の内容に踏み込んだ見分が行われたのは郡立中学校を併置する米沢の興譲小学校であった。東置賜郡の川樋小学校は小休のみ、屋代学校（高畠小学校）では当地の名産品や展示された書画古器物の天覧が主であった。しかし、こうした両校でも、そこに通った生徒や地域の人々は、その後記念碑を建立し、また校歌の歌詞に天皇訪問の事実を織り込むなど、天皇の訪問校としての「名誉」や「誇り」、「由緒」、「ほまれ」を、学校の「伝統」として継承していくことになった。

三島通庸は、新制山形県成立以前の1874(明治7)年12月に第2次酒田県の県令に就いたが、それを後押しした当時の内務卿大久保利通は、三島に対して、「深く開明ノ治化ニ沐浴」さない「辺遇」の地の、「皇家ノ徳化」「開明ノ治化」を進めることを期待した(『伝記未定稿 一』『山形県史 資料編二 明治初期下 三島文書』)。本研究では、置賜地方のとりわけ東置賜郡において、こうした天皇の権威の受容が、近代学校の創設とそこへの明治天皇の訪問を通じて、三島県政との政治的親和性を有しながら進められていった過程が明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 鈴木敦史	4. 巻 5
2. 論文標題 明治前期の山形県置賜地方における教育と政治	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育思想・教授法研究年報	6. 最初と最後の頁 1 - 18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木敦史	4. 巻 19
2. 論文標題 明治十四年巡幸における奉迎準備と地域社会の対応 山形県を事例として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東海大学紀要海洋学部	6. 最初と最後の頁 13 - 22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 鈴木敦史
2. 発表標題 明治前期の山形県東置賜郡における学校教育と天皇像の形成 明治十四年巡幸での天皇の学校訪問に着目して
3. 学会等名 日本教育学会第80回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鈴木敦史
2. 発表標題 山形県庄内地方における公立小学校の設立と天皇像の醸成 明治14年の天皇巡幸に着目して
3. 学会等名 日本教育史学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------